

2022 年横浜ナザレン教会降誕節第七主日(2/6)礼拝

「神を迎える備え」

使徒言行録第1章 12 節から 20 節

【聖書】

使徒言行録 1:12 使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。13 彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。14 彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。

15 そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って言った。百二十人ほどの人々が一つになっていた。16「兄弟たち、イエスを捕らえた者たちの手引きをしたあのユダについては、聖霊がダビデの口を通して預言しています。この聖書の言葉は、実現しなければならなかったのです。17 ユダはわたしたちの仲間の一人であり、同じ任務を割り当てられていました。18 ところで、このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。19 このことはエルサレムに住むすべての人に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で『アケルダマ』、つまり、『血の土地』と呼ばれるようになりました。20 詩編にはこう書いてあります。『その住まいは荒れ果てよ、／そこに住む者はいなくなれ。』／また、／『その務めは、ほかの人が引き受けるがよい。』

1 大きな謎

聖書の語る真の神は、私達にとって大きな謎です。教会では、「天の御神」とか「父なる神」とか繰り返し語られるので、神を身近に思い、神の事は殆どわかったような気持ちになるかもしれません。が、そんな時は要注意です。天地万物、この世界を、宇宙を造られた神、無から有を生み出す神を被造物である私達が理解し切れる筈はないから。天の御神は、その多くを謎の中に隠すお方です。イエス・キリストについても、私達に分かることは、ほんの一部にすぎません。だから、聖書の物語には多くの謎があります。

イスカリオテのユダも又、そのような聖書の謎の一つです。ルカは、主イエスの昇天のあと、使徒達と120人の仲間が心を合わせて祈っている事を語った後、イスカリオテのユダの最期について語るペトロの言葉を記します。どうしてでしょうか。このエピソードにはどういう意味があるのでしょうか。このことを今日はご一緒に、み言葉から聞いていきたいと思いません。

2 イスカリオテのユダ

クリスチャンでない人でも知っている有名な「イスカリオテのユダ」。彼は、主イエスが夜を徹して祈って選ばれた十二人の内の一人でした。どうして主イエスがイスカリオテのユダを選ばれたのか、これも又、聖書の謎の一つですが、イスカリオテのユダは、ペトロ達とガリラヤから苦楽を共にしてきた事は確かなようです。ペトロ達と同じ任務を主イエスから委ねられ、伝道旅行にも出かけました。そんな彼がどうして、主イエスを裏切ったのでしょうか？

イスカリオテのユダのことを考えていると、昔の母の言葉を思い出しました。まだ子供の頃、私達が夕食後にテレビを見ていると、食事の後片付けを終えた母がやって来て、毎回のように「この人、いいもの？悪者？」と聞いた言葉です。今もそうでしょうけれども、正義の味方、対、悪者という単純な構図のドラマや映画は、私達庶民に人気があります。それは、私達庶民の知的レベルが低いからではなくて、庶民であればあるほど、人間の現実、この世の現実が、正義か悪か、黒か白か単純に割り切れない、という事を知っているからでしょう。だから、せめて作りごとの世界だけでも、自分が100%の正義の側にいると安心したいし、必ず勝つ側にいたい、という願望の結果だと思います。私達の欲求が反映されているのが正義・対・悪の構図なのでしょう。

一方、聖書が私達に描いて見せるのは、神と人間、そして人間同士の現実です、神も謎に満ちていますが、その神に造られた人も謎多い存在。人間を色で表現すれば一つだけの色で描ける人はいないでしょう。皆、いろんな面を持っており複雑です。聖書の中には、単純な悪者に描かれている人はいません。イスカリオテのユダもそうで、聖書は彼を根っからの悪者とは描いていないのです。

福音書の中では、マタイ福音書が、イスカリオテのユダについて、最も詳しく描いています。27章にはこうあります。「その頃、イエスを裏切ったユダは、イエスに有罪の判決が下ったのを知って後悔し、銀貨30枚を祭司長たちや長老たちに返そうとして、『私は罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました』と言った。しかし彼らは、『我々の知ったことではない・お前の問題だ』と言った。そこで、ユダは銀貨を神殿に投げこんで首をつって死んだ。」(マタイ27:3~5) これを読むと、イスカリオテのユダは、まさか主イエスが死刑になるとは思っていなかった、主イエスのやり方が彼の考えとは違った、だから、主を困らせて、やり方を変えさせよう、と、祭司長達に逮捕させた、という事が分かります。ですが、何の罪も犯していない、死刑になどなる筈のない人が、有罪判決を受け、十字架に架けられると知って、ユダはパニックとなりました。イエスの無罪を祭司長達に訴えますが、受け入れられないと知って彼は絶望し、自死してしまいました。浅はかで哀れなユダ、マタイが描くユダです。

一方、ルカ福音書は、もっと辛辣にイスカリオテのユダを描きます。教会の最初から、イスカリオテのユダという裏切りの使徒の存在は大きな謎であり、様々な解釈がされてきたことを伺わせます。ルカは、「イスカリオテのユダにサタンが入った」と語り、彼の裏切りをサタンが働いた結果だと言います。ルカも、イスカリオテのユダの人間性に、深い罪の原因を求めてはいません。サタンに付け入られるスキのない者などいません。人間なら誰でも、イスカリオテのユダになりうる、とルカは警告しているようです。

そして、マタイもルカも、イスカリオテのユダが、自分のしてしまったことに絶望し、自ら、命を絶ったことを伝えます。ペトロは、ユダが迎える事になった滅びを次のように語ります。「ところで、このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買ったのですが、その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました。このことはエルサレムに住むすべての人に知れ渡り、その土地は彼らの言葉で『アケルダマ』、つまり、『血の土地』と呼ばれるようになりました。」むごい最期ですが、イスカリオテのユダの滅びは、神のみ旨として厳粛に受け止め、薄めたりやわらげたりするべきではないでしょう。天の御神をドラえもんのように、人間に都合のよいお方にするのは、サタンの好むところであり、第二のユダを生み出すだけです。天の御神は、唯一、一人一人を根本的に審く事がおできになる方です。私達は、みな、いつかは神の御前に立たねばならない一人一人である事を忘れることはできません。

3 上の部屋

しかし、このようなイスカリオテのユダのすさまじい最期を語るペトロの言葉。言葉だけ追えば、主の十字架をもたらした裏切り者を糾弾する言葉のようにも聞こえます。しかし、私はそれでも、ペトロの心に憎しみはなかった、と思います。いえ、却って深い悲しみをもって、ペトロはユダの最期を伝えたのではないのでしょうか。そう考えるにはわけがあります。ペトロをはじめ使徒達や弟子たち120人が、どこで祈っていたか、にあります。

13節「彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。」この「泊まっていた家の上の部屋」こそ、主が弟子たちと最後の過越しの食事をとられた部屋。つまり、聖餐を定めた部屋なのです。使徒達は、主イエス・キリストの記憶の色濃く残る場所、「これはあなたがたのために与えられた私の体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である」という主イエスの声が響き渡った部屋で、仲間達と心を合わせて祈っていました。

そして、この部屋は、主イエスがイスカリオテのユダの裏切りを予告した部屋でもありません。「しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」(ルカ福音書22:21, 22)ここで「不幸だ」と嘆く主イエスは、「ウーアイ」という、「あなたのことを考えると私の胸は張り裂けそうだ」という意味の言葉を使っています。主イエスの深い悲しみが響いています。主は裏切りの使徒・ユダを深く愛しておられた。だが、ユダはサタンに魅入られている、神の裁きによってもたらされるユダの滅びを主はご自身の痛みとしておられる。それが起こった時には分からなかった主イエス・キリストの愛とそれ故の悲しみがペトロ達には分かった。その主イエス・キリストの愛の記憶が鮮やかに残る所で、ペトロは仲間の一人ユダの罪を語ります。なんと悲しいことか。人の罪のなんと深いことか。主イエスの嘆きに、ペトロ達も声を合わせているようです。

この主イエスの憐みは、一人ユダに向けられていたわけではありません。ペトロ達十一人の使徒、他の弟子たち、いえ、全ての人、ご自身を殺す罪びとにさえ向けられる深い深い憐み、滅びを嘆き悲しむ主の愛が満ちた部屋です。神を神とできず自分達を神とし、自分達の正義に生きて、裁きあう私達人間。主イエス・キリストは、罪を犯す事のなかったお方にも拘わらず、私達の罪を他人事とせずにとことん付き合い、共に地獄へと行こうと、十字架に架かれる主イエスの深く高く大きな憐みが満ち渡った部屋こそ、ペトロ達が祈っている部屋なのです。

主イエスの深い憐みの故に私は考えざるを得ません。考えても無駄かもしれませんが、考えてしまう。もし、仮にユダが自死せずに、復活のイエス・キリストに会う事ができていたら、結果は全く違ったものになったかもしれない、と思うのです。彼が、自分のやった事に深く絶望する、それは致し方ない事です、しかし、そこで、自分の滅びを覚悟しつつ恐怖に震え戦きつつも、御神に主イエスの助けを求めて額つき祈ることをしていれば、ユダは甦りの主イエスに会えたのではないか、彼が自分に絶望しても神に希望をおいていたら、このような最期を迎える事はなかったのではないだろうか、と思えてなりません。ユダに入ったサタンは、ユダに悔い改めの希望を持つ事を許さなかったのです。

一方、ペトロも又十字架の恐怖の前に主イエスを裏切りました。三度も、完全に「イエスと自分は関係ない」と否定しました。ですが、ペトロは、十字架の死から甦らされた主イエス・キリストと再会し、立ち直ることができました。ペトロの信仰が優れていたからではありません。主イエスご自身が、赦しの眼差しの中にペトロを振り返ってくださったから。又、ペトロの為に執り成しの祈りをささげてくださったからです。ペトロとユダの違いは、この主イエスを思い出せたか、出せなかったか、そして神の方を向く事ができたか、出来なかったか、それが、ペトロ達とユダの違い、命と滅びを分ける大きな違いとなりました。

4 共同体としての悔い改め

さて、ペトロはじめ使徒達は、最初の聖餐が行われた部屋で祈り続けました。そして、十字架に架かる前の晩の事を、神に祈りつつ、幾度も思い返したのではないかと思います。彼らは、間近に迫る十字架の前に、「ここにいる者の一人が私を裏切る」と告げる主イエス・キリストの言葉に誰であろうか？と仲間を疑い詮索の心を起こしました。その在り方は、聖餐の恵みを受けても、彼らはなんら変わりません。主の十字架の宣告を聞きつつも、誰が一番偉いかを議論し始めます。そして主イエスから、次のようにたしなめられます。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれはいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようになりなさい。」(ルカ福音書22:25～26)

聖餐を受けたのにも拘わらず、使徒達は、自分の事しか見ていませんでした。主を中心に、その場に一緒にいる他の者を、主イエス・キリストの恵みを共に分かち合う仲間とは思わ

ず、主の愛を競い合うライバルだと見ていたのです。彼らが、イスカリオテのユダの心にサタンが入り込んだことに気づかなかったのも、当然でしょう。使徒達は、ユダを見ていなかった、ユダを愛してはいなかったのです。いや、彼らは自分以外は誰も見ていなかったし、誰も愛していなかった。そして、主イエスをも見てはいなかった、ありのままの私達も、そういう私達です。

聖書は、そのような者達の共同の罪を語ります。旧約聖書には、「神は、ご自身に対する罪を、三代、四代まで問うが、神を愛し神の戒めを守る者には、幾千代に及ぶ慈しみを与える」という表現が繰り返してきます。何故「一人の人の背きの罪を、三世代、四世代後の子孫にも問う」のでしょうか。それは、当時は、三世代、四世代が同じ家に暮らしていたから、だと言われています。家族の一員が罪を犯すのを同じ家に暮らしながら見逃した、愛をもっていさめなかった、それもまた罪であることを聖書は指摘しているのではないか、と思うのです。聖書の御神は、罪を犯す仲間を見殺しにする者の心に、神と人への愛の少なさを見て、これを戒めるお方です。

ペトロをはじめ使徒達は、主イエスの憐み、主の愛の記憶が満ちる部屋で祈り続け、その事に気づかされたのではないか、と思います。聖餐を宣言し、ユダの裏切りを告げる主イエスを思い起こし、自分達が如何に自己中心的で仲間のユダに対して愛をもって臨んでいなかったか、を思い知らされたのではないのでしょうか。

勿論、罪は、最終的には、神とその人との問題、仲間がその人を想うように動かす事はできません。しかし、主イエス・キリストは、「互いに愛し合いなさい」と繰り返し仰る。それは、具体的な行動を伴う愛です。「互いに愛し合う」とは、父なる御神に祈りつつ、仲間どうし、互いに主イエス・キリストを指さしあい、証しあって、罪を犯しそうな人に父なる御神のもとへと帰るように勧め合う務めを負う事だ、一人一人が互いの為に、神に執り成しの祈りを献げること。何故なら、主イエスご自身が父なる神を人々に示し証し、そして一人一人の為に執り成しの祈りを献げてくださったお方だからです。主イエスに倣って仲間を愛する、それが、主が選び集めてくださった人々を、イエス・キリストにあって一つの共同体とする、だからこそ、主イエスは一人ペトロだけでなく、12人の使徒を選ばれた、そして、教会の基礎とされたのです。こう考えていきますと、使徒達を代表して120人の前で、ユダについて語ったペトロの言葉は、今まさに生まれようとしている信仰共同体、教会の悔い改めの言葉なのです。教会という主イエス・キリストに集められた群れは、その最初を、聖餐の食卓のもとで心を合わせた祈りがもたらす悔い改めをもって歩み始めました。人間が考え得る事ではありません。まだ聖霊なる御神が降ってはいなかったけれども、彼らが主イエス・キリストの深い憐みと愛の記憶が残る部屋で祈っていたからこそ、もたらされた奇跡だと思います。

5 神を迎える準備

使徒と仲間達が主イエスの深い愛の内での祈り、悔い改めた事は、聖霊なる御神をお迎えする準備となりました。主イエスをキリストと信じる信仰が与えられた仲間と共に、御前に自

分自身を低く謙り、罪を悔い改め、神を仰いで祈る時、聖霊なる御神が豊かに豊かに、恵のシャワーのように注がれるのだ、と聖書は私達に語っているようです。この伝統は、勿論、私達の教会の礼拝にも受け継がれています。この礼拝で私達は聖霊なる御神をあふれるほどに受け、互いに愛しあい、励まし合いつつ、主イエスの再び来られる時を待ち望む群れとなっていきます。

今日は二月の第一週、聖餐の時を持ちます。主イエス・キリストの深い愛の内に、すぐる日々を振り返り悔い改めて新しい歩みを始めた最初の教会に倣って、私達もこの主イエス・キリストの聖餐の食卓から一步を踏み出したいと願います。